

《論 説》

中国人私費留学生の日本社会への適応と  
ソーシャル・サポートの関係

岡 益 巳  
深 田 博 己<sup>(1)</sup>  
周 玉 慧<sup>(2)</sup>

1. 問 題

1. 1. 中国系留学生の適応とソーシャル・サポートとの関係

在日中国系留学生<sup>(3)</sup>のソーシャル・サポートの測定次元を検討した周 [1994] は、知覚されたサポートと実行されたサポートの間に有意な正の相関関係がみられるものの、これらのサポートと必要とするサポートとの間には相関関係が存在しない、と報告した。また、周 [1994] は、中国系留学生においては、知覚されたサポートや実行されたサポートに比べて、必要とするサポートの方が多いことを見出した。このように必要とするサポートは、他の2つの測定次元に比較すると特異な測定次元であると考えられる。

在日中国系留学生の適応とソーシャル・サポートとの間の関係を分析した Jou & Fukada [1995a] は、両者の間の関係がサポートの測定次元によって

---

(1) 広島大学教育学部，社会心理学専攻

(2) 中央研究院中山人文社会科学研究所（台湾），社会心理学専攻

(3) 「中国系留学生」には，中華人民共和国出身者のほか，台湾出身者も含まれる。

全く異なることを発見した。すなわち、適応との間に、必要とするサポートは有意な負の関係を示したが、実行されたサポートは逆に有意な正の関係を示し、知覚されたサポートは有意な関係を示さなかった。さらに、必要とするサポートと実行されたサポートとのギャップの大きさや、必要とするサポートと知覚されたサポートとのギャップの大きさと適応との間には、それぞれ有意な負の関係が見出された。

続いて、Jou & Fukada [1995b] は、在日中国系留学生の適応とソーシャル・サポートとの間の関係に関して、サポートの送り手間で比較を試みた。その結果、在日中国系留学生が日本人大学生に対して必要とするサポートは、彼らの適応との間に有意な負の関係を示したが、彼らが日本人教官や他の留学生や学外の友人に対して必要とするサポートは、適応との間に有意な関係を示さなかった。また、在日中国系留学生が日本人教官から受け取ったサポートは彼らの適応との間に有意な正の関係を示したが、彼らが他の送り手から受け取ったサポートは適応との間に有意な関係を示さなかった。必要とするサポートと受け取ったサポートとの間のギャップは、送り手が日本人教官の場合にのみ、在日中国系留学生の適応との間に有意な負の関係を示した。

以上の先行研究の結果から、在日中国系留学生が必要とするサポートと彼らの適応との間にはネガティブな関係が存在することが明らかである。これは、不適応な留学生ほど、他者からのソーシャル・サポートをより多く必要としていると解釈できる。また、在日中国系留学生が受け取ったサポート（実行されたサポート）と彼らの適応の間にはポジティブな関係が存在することも立証され、ソーシャル・サポートを多く受け取るほど、適応が改善されると考えることができよう。

## 1. 2. 中国人私費留学生のソーシャル・サポート及び適応

中国人私費留学生<sup>(4)</sup>のソーシャル・サポートに関して、周・深田 [1995,

1996] のサポートの互恵性という立場から、岡・深田・周 [1995] は、サポートの受け手としての必要とするサポートと送り手としての提供可能なサポートに注目した。そして、経済的困窮度の著しい中国大陸出身の私費留学生の経済的特徴に基づき、経済的側面に関係する人口学的変数が彼らのサポートに深く関わっていると仮定した。岡他 [1995] は、総収入やアルバイトの必要性と言った経済的側面に関係する人口学的変数が、中国人私費留学生の必要とするサポート及び提供可能なサポートに密接に関わっていることを証明し、当初の予想を支持する結果を得た。また、中国人私費留学生が必要とするサポートと提供可能なサポートは、勉学領域で最も多く、物質的タイプで最も少ないという点に共通点がみられた。しかし、必要とするサポートが情緒領域で最も少ないのに対し、提供可能なサポートは環境・文化領域と人間関係領域で最も少なく、さらに、必要とするサポートが心理的タイプ、指導的タイプ、情動的タイプで同量であるのに対し、提供可能なサポートは、心理的タイプ、指導的タイプ、情動的タイプの順に多いという点に、相違点がみられた。

続いて、中国人私費留学生の適応、留学目的重視度、留学目的達成満足度を検討した岡・深田・周 [1996] は、次のような結果を得た。すなわち、中国人私費留学生は、交流や文化体験よりも勉学や言語習得の方を留学目的として重視している。留学目的達成に伴う満足感は、交流面で最も低く、適応感も、勉学面や環境面よりも交流面や情緒面の方が低い。

### 1. 3. 本研究の目的

本研究では、中国人私費留学生を対象として取り上げ、彼らの必要とするサポートと適応との関係を再確認するだけでなく、必要とするサポートと留

---

(4) 本論の「中国人私費留学生」は、専ら中華人民共和国出身者を指し、中国政府派遣留学生を含まない。以下、「中国人留学生」という場合も同様である。

学目的重視度あるいは留学目的達成度との間の関係も併せて検討してみたい。先行研究 (Jou & Fukada [1995a, 1995b]) の結果に基づき、中国人私費留学生の必要とするサポートと適応あるいは留学目的達成満足度との間にはネガティブな関係の存在が予想される。すなわち、中国人私費留学生の必要とするサポートの量が多くなるほど、それだけ彼らの適応度あるいは留学目的達成満足度は低くなるであろうと予想される。

また、中国人私費留学生が他者に対して提供可能なサポートは、サポートの送り手としての余裕を意味するので、提供可能なサポートと適応あるいは留学目的達成満足度との間にはポジティブな関係の存在が予想される。すなわち、中国人私費留学生の提供可能なサポートの量が多くなるほど、それだけ彼らの適応度あるいは留学目的達成満足度は高くなるであろうと予想される。

## 2. 方 法

### 2. 1. 調査対象と調査手続き

#### 2. 1. 1. 調査対象

岡山県内の大学と短期大学に在籍する中国大陸出身の私費留学生130名を調査対象とし、86名の回答を得た。このうち、完全回答を寄せた80名を分析対象とした。

#### 2. 1. 2. 調査手続き

「留学生活に関する調査」と題する質問紙調査票を作成し、1991年8月下旬から9月上旬にかけて調査を実施した。なお、調査方法と調査手続きの詳細については、岡 [1992] を参照されたい。

### 2. 2. 調査内容

サポートの測定には、周 [1992] の在日中国系留学生用ソーシャル・サ

ポート尺度短縮版を使用した。尺度は15項目から成り、尺度の構成内容は、4領域（勉学、人間関係、情緒、環境・文化）×4タイプ（物質的、心理的、指導的、情動的）の15条件（情緒領域×情動的タイプの1条件を除く）1項目ずつである。必要とするサポートに関しては、それぞれのサポートを周りの人々からどのくらいほしいと思っているかを、4段階（1～4点：高得点がサポート大）で評定させた。提供可能なサポートに関しては、それぞれのサポートを周りの人々に対してどのくらい与えることができると思うかを、4段階（1～4点：高得点がサポート大）で評定させた。総得点、領域別得点、タイプ別得点は、項目平均を用いた。

適応の測定には、上原[1988]に基づき、16項目の適応尺度を作成して使用した。尺度の構成内容は、4領域（勉学、交流、情緒、環境）4項目ずつから成る。それぞれの項目に対して4段階（1～4点：高得点が適応高）で評定させた。総得点、領域別得点は項目平均を用いた。

留学目的重視度あるいは留学目的達成満足度に関しては、4領域（勉学、交流、文化体験、言語）1項目ずつの4段階評定（1～4点：高得点は重視度大あるいは満足度大）を行わせた。

### 3. 結 果

#### 3. 1. 必要とするサポートとの関係

##### 3. 1. 1. 必要とするサポートと適応との関係

総量としての必要とするサポートと総量としての適応との間の関係を分析するために、これらの総得点を使用して、相関係数を求めた。しかし、必要とするサポートの総得点と適応の総得点との間には有意な相関関係は見出せなかった ( $r=.05$ ,  $n. s.$ )。

領域別あるいはタイプ別の必要とするサポート量と総量としてのあるいは領域別の適応との間の関係を検討するために、4領域あるいは4タイプの必

要とするサポートを説明変数とし、適応の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析を行い、その結果を表1に示した。表1から、情緒領域の必要とするサポートと情緒領域の適応との間に有意な負の $\beta$ 係数が、また、指導的タイプの必要とするサポートと環境領域の適応との間に有意な正の $\beta$ 係数が認められた。すなわち、情緒領域でのサポートをより多く必要とする者は、情緒領域での適応がより劣ることが分かった。そして、指導的タイプのサポートをより多く必要とする者は、環境領域での適応がより優れていることが分かった。

領域×タイプの条件別の必要とするサポート量と総量としてのあるいは領域別の適応との間の関係を検討するために、15条件の必要とするサポートを説明変数とし、適応の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析を行った。表2から、人間関係領域の物質的サポートと環境領域の適応との間に有意な正の $\beta$ 係数が見出されるにとどまった。すなわち、人間関係領域で物質的なサポートをより多く必要とする者ほど、環境領域での適応がより良好であることが示された。

表1 4領域あるいは4タイプの必要とするサポートを説明変数とし、適応の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析の結果

必要とする サポート	適 応				
	総得点	勉学領域	交流領域	情 緒 領 域	環 境 領 域
勉学領域	0.14	-0.01	-0.07	0.26	0.07
人間関係領域	0.15	0.18	-0.19	0.18	0.22
情緒領域	-0.15	-0.11	0.29†	-0.39*	-0.03
環境・文化領域	-0.06	-0.04	0.05	-0.01	-0.23
<i>R</i>	.19	.11	.23	.36*	.18
物質的タイプ	-0.01	-0.18	-0.05	0.13	-0.03
心理的タイプ	0.03	0.19	0.24	-0.11	-0.17
指導的タイプ	0.15	0.06	0.06	0.00	0.40*
情動的タイプ	-0.11	-0.04	-0.17	0.01	-0.17
<i>R</i>	.12	.17	.19	.10	.25

注) 表内の数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) である。

\* $p < .05$ , † $p < .10$

表2 15項目の必要とするサポートを説明変数とし、適応の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析の結果

必要とするサポート	総得点	適 応			
		勉学領域	交流領域	情緒領域	環境領域
1. 勉学領域・物質的タイプ	0.12	-0.00	0.00	0.21	0.03
2. 勉学領域・心理的タイプ	0.25	0.11	0.30†	0.22	-0.04
3. 勉学領域・指導的タイプ	-0.05	-0.14	-0.28†	0.06	0.21
4. 勉学領域・情報的タイプ	-0.13	0.04	-0.05	-0.16	-0.12
5. 人間関係領域・物質的タイプ	0.12	-0.02	-0.17	0.11	0.44*
6. 人間関係領域・心理的タイプ	-0.08	-0.10	0.01	0.02	-0.23
7. 人間関係領域・指導的タイプ	0.04	0.32†	-0.20	-0.05	0.15
8. 人間関係領域・情報的タイプ	0.22	-0.05	0.23	0.33†	-0.10
9. 情緒領域・物質的タイプ	-0.17	-0.11	0.20	-0.30†	-0.13
10. 情緒領域・心理的タイプ	-0.09	0.14	-0.11	-0.17	0.02
11. 情緒領域・指導的タイプ	0.12	-0.08	0.22	0.01	0.22
12. 環境文化領域・物質的タイプ	-0.06	-0.16	-0.10	0.16	-0.24
13. 環境文化領域・心理的タイプ	-0.02	0.19	-0.03	-0.10	-0.03
14. 環境文化領域・指導的タイプ	0.12	-0.12	0.24	0.10	0.05
15. 環境文化領域・情報的タイプ	-0.28†	0.00	-0.19	-0.29†	-0.20
R	.37	.34	.43	.50	.42

注) 表内の数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) である。

\* $p < .05$ , † $p < .10$

### 3. 1. 2. 必要とするサポートと留学目的重視度との関係

総量としての必要とするサポートと総量としての留学目的重視度との間の関係を分析するために、これらの総得点の間の相関関係を算出したところ、有意な正の相関関係 ( $r = .58, p < .001$ ) が得られた。すなわち、全体的にサポートをより多く必要としている者ほど、多様な留学目的をより重視していることが判明した。

領域別あるいはタイプ別の必要とするサポート量と総量としてのあるいは領域別の留学目的重視度との間の関係を検討するために、4領域あるいは4タイプの必要とするサポートを説明変数とし、留学目的重視度の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析を行い、その結果を表3に示した。表3から、勉学領域の必要とするサポートと言語領域の重視度との間に有意な正の $\beta$ 係数が、また、心理的タイプの必要とするサポートと全体的重視度及び勉学領域の重視度との間に有意な正の $\beta$ 係数が、さらに指導的タイ

表3 4領域あるいは4タイプの必要とするサポートを説明変数とし、留学目的重視度の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析の結果

必要とするサポート	留学目的重視度				
	総得点	勉学領域	交流領域	文化体験領域	言語領域
勉学領域	0.21†	0.17	0.19	0.04	0.29*
人間関係領域	0.20	0.22	0.16	0.32†	-0.20
情緒領域	-0.02	-0.01	-0.08	0.02	0.03
環境・文化領域	0.29†	0.17	0.29†	0.14	0.30
<i>R</i>	.59***	.48***	.50***	.48***	.39*
物質的タイプ	-0.04	-0.28†	0.02	0.11	-0.05
心理的タイプ	0.32*	0.38*	0.18	0.14	0.34†
指導的タイプ	0.29†	0.13	0.21	0.46**	-0.04
情報的タイプ	0.09	0.30†	0.14	-0.19	0.10
<i>R</i>	.60***	.55***	.48***	.52***	.36*

注) 表内の数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) である。

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

プの必要とするサポートと文化体験領域の重視度との間に有意な正の $\beta$ 係数が認められた。すなわち、勉学領域でサポートをより多く必要としている者ほど、言語領域をより重視しており、心理的タイプのサポートをより多く必要としている者ほど、多様な留学目的をより重視し、特に勉学領域をより重視していること、並びに、指導的タイプのサポートをより多く必要としている者ほど、文化体験領域をより重視していることが明らかとなった。

領域×タイプの条件別の必要とするサポート量と総量としてのあるいは領域別の留学目的重視度との間の関係を検討するために、15条件の必要とするサポートを説明変数とし、留学目的重視度の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析を行った。表4から、環境・文化領域の心理的タイプのサポートと留学目的重視度の総得点及び交流領域得点との間に有意な正の $\beta$ 係数が発見された。また、人間関係領域の指導的タイプのサポートと文化体験領域の重視度得点との間にも有意な正の $\beta$ 係数が得られた。すなわち、環境・文化領域の心理的タイプのサポートをより多く必要としている者ほ



表4 15項目の必要とするサポートを説明変数とし、留学目的重視度の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析の結果

必要とするサポート	総得点	留学目的重視度			
		勉学領域	交流領域	文化体験領域	言語領域
1. 勉学領域・物質的タイプ	-0.03	0.05	-0.00	-0.11	0.02
2. 勉学領域・心理的タイプ	0.21	0.12	0.07	0.21	0.27
3. 勉学領域・指導的タイプ	0.16	0.14	0.05	0.15	0.14
4. 勉学領域・情報的タイプ	0.08	-0.03	0.26†	-0.14	0.17
5. 人間関係領域・物質的タイプ	-0.02	-0.22	0.00	0.23	-0.22
6. 人間関係領域・心理的タイプ	-0.08	0.21	-0.27†	-0.14	0.07
7. 人間関係領域・指導的タイプ	0.25†	0.15	0.23	0.39*	-0.12
8. 人間関係領域・情報的タイプ	-0.07	0.20	-0.04	-0.15	-0.16
9. 情緒領域・物質的タイプ	0.04	-0.08	-0.08	0.12	0.16
10. 情緒領域・心理的タイプ	0.05	-0.05	0.27†	-0.00	-0.13
11. 情緒領域・指導的タイプ	-0.03	0.06	-0.19	0.05	0.02
12. 環境文化領域・物質的タイプ	-0.07	-0.15	-0.03	-0.04	-0.02
13. 環境文化領域・心理的タイプ	0.39*	0.28	0.50**	0.05	0.39†
14. 環境文化領域・指導的タイプ	-0.10	-0.22	-0.02	0.07	-0.20
15. 環境文化領域・情報的タイプ	0.08	0.26†	0.00	-0.09	0.16
<i>R</i>	.67***	.61**	.64**	.59*	.50

注) 表内の数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) である。  
 \*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

ど、多様な留学目的をより重視し、特に交流領域をより重視していること、また、人間関係領域の指導的タイプのサポートをより多く必要としている者ほど、文化体験領域をより重視していることが明らかとなった。

### 3. 1. 3. 必要とするサポートと留学目的達成満足度との関係

総量としての必要とするサポートと総量としての留学目的達成満足度との間の関係を分析するために、これらの総得点の間の相関関係を算出したが、両得点間に有意な相関関係を見出すことはできなかった ( $r = .10$ , *n. s.*)。

領域別あるいはタイプ別の必要とするサポート量と総量としてのあるいは領域別の留学目的達成満足度との間の関係を検討するために、4領域あるいは4タイプの必要とするサポートを説明変数とし、留学目的達成満足度の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析を行い、その結果を表5に示した。表5から、有意な $\beta$ 係数が全くみられないことが分かる。

表5 4領域あるいは4タイプの必要とするサポートを説明変数とし、留学目的達成満足度の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析の結果

必要とするサポート	留学目的達成満足度				
	総得点	勉学領域	交流領域	文化体験領域	言語領域
勉学領域	0.09	0.06	0.15	-0.08	0.14
人間関係領域	0.03	-0.18	-0.20	0.23	0.18
情緒領域	0.08	-0.06	0.07	0.07	0.12
環境・文化領域	-0.06	0.09	0.03	-0.12	-0.15
<i>R</i>	.12	.14	.14	.17	.27
物質的タイプ	0.20	0.01	0.23	0.23	0.12
心理的タイプ	0.01	0.13	-0.10	-0.03	0.03
指導的タイプ	0.13	0.09	0.10	0.15	0.04
情動的タイプ	-0.22	-0.34†	-0.22	-0.23	0.08
<i>R</i>	.19	.23	.17	.20	.24

注) 表内の数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) である。

†  $p < .10$

領域×タイプの条件別の必要とするサポート量と総量としてのあるいは領域別の留学目的達成満足度との間の関係を検討するために、15条件の必要とするサポートを説明変数とし、留学目的達成満足度の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析を行った。しかし、表6に示したように、有意な $\beta$ 係数は全くみられなかった。

### 3. 2. 提供可能なサポートとの関係

#### 3. 2. 1. 提供可能なサポートと適応との関係

提供可能なサポートの総得点と適応の総得点との間の相関関係を検討したところ、両得点間には有意な正の相関関係 ( $r = .25, p < .05$ ) の存在することが明らかとなった。すなわち、全体的により多くの提供可能なサポートをもつ者ほど、全体的な適応が優れていることが判明した。

4領域あるいは4タイプの提供可能なサポートを説明変数とし、適応の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析を行った。表7による

表6 15項目の必要とするサポートを説明変数とし、留学目的達成満足度の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析の結果

必要とするサポート	留学目的達成満足度				
	総得点	勉学領域	交流領域	文化体験領域	言語領域
1. 勉学領域・物質的タイプ	0.10	0.22	0.10	-0.03	0.02
2. 勉学領域・心理的タイプ	-0.00	0.04	-0.05	-0.20	0.19
3. 勉学領域・指導的タイプ	0.12	0.15	0.14	0.08	0.00
4. 勉学領域・情報的タイプ	-0.03	-0.20	-0.02	0.04	0.05
5. 人間関係領域・物質的タイプ	0.15	0.06	0.15	0.20	0.03
6. 人間関係領域・心理的タイプ	0.16	0.17	-0.10	0.29	0.10
7. 人間関係領域・指導的タイプ	-0.08	-0.09	-0.11	-0.02	-0.02
8. 人間関係領域・情報的タイプ	-0.18	-0.27	-0.21	-0.22	0.13
9. 情緒領域・物質的タイプ	0.10	0.18	-0.02	0.10	0.04
10. 情緒領域・心理的タイプ	-0.19	-0.34†	0.07	-0.09	-0.21
11. 情緒領域・指導的タイプ	0.21	0.16	0.06	0.03	0.33
12. 環境文化領域・物質的タイプ	0.02	-0.29	0.10	0.11	0.09
13. 環境文化領域・心理的タイプ	0.00	0.27	-0.01	-0.11	-0.10
14. 環境文化領域・指導的タイプ	-0.06	-0.19	0.08	0.12	-0.18
15. 環境文化領域・情報的タイプ	-0.12	0.07	-0.12	-0.17	-0.11
R	.29	.43	.25	.40	.37

注) 表内の数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) である。  
† $p < .10$

表7 4領域あるいは4タイプの提供可能なサポートを説明変数とし、適応の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析の結果

提供可能なサポート	適応				
	総得点	勉学領域	交流領域	情緒領域	環境領域
勉学領域	0.31†	0.08	0.10	0.44**	0.04
人間関係領域	0.22	0.03	0.16	0.09	0.35†
情緒領域	-0.22	-0.24	0.08	-0.33*	0.01
環境・文化領域	-0.01	0.20	-0.03	-0.01	-0.21
R	.36*	.19	.28	.38*	.27
物質的タイプ	-0.05	-0.42†	-0.06	0.19	-0.03
心理的タイプ	0.04	0.19	-0.02	-0.01	-0.02
指導的タイプ	0.28	0.38†	0.38†	0.02	0.09
情報的タイプ	0.01	-0.05	-0.01	-0.02	0.13
R	.28	.29	.31	.18	.17

注) 表内の数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) である。  
\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

と、勉学領域での提供可能なサポートと情緒領域の適応との間に有意な正の $\beta$ 係数が認められ、また、情緒領域の提供可能なサポートと情緒領域の適応との間に有意な負の $\beta$ 係数が認められた。すなわち、勉学領域でより多くのサポートを提供可能な者ほど、情緒領域での適応が良好である反面、情緒領域でより多くのサポートを提供可能な者ほど、情緒領域での適応が悪いことが示された。

15条件の提供可能なサポートを説明変数とし、適応の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析を行い、その結果を表8に示した。情緒領域の物質的タイプのサポートと勉学領域の適応との間に有意な負の $\beta$ 係数が、また、環境・文化領域の指導的タイプのサポートと勉学領域の適応との間に有意な正の $\beta$ 係数が得られた。そして、人間関係領域の物質的タイプのサポートと環境領域の適応との間に有意な正の $\beta$ 係数が得られた。環境・文化領域での指導的タイプのサポートをより多く提供可能な者ほど、勉学領域

表8 15項目の提供可能なサポートを説明変数とし、適応の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析の結果

提供可能なサポート	総得点	適 応			
		勉学領域	交流領域	情緒領域	環境領域
1. 勉学領域・物質的タイプ	0.06	-0.07	0.05	0.19	-0.18
2. 勉学領域・心理的タイプ	0.21	0.21	0.03	0.28†	-0.06
3. 勉学領域・指導的タイプ	0.06	0.04	0.02	0.02	0.11
4. 勉学領域・情動的タイプ	0.01	-0.05	0.01	-0.02	0.13
5. 人間関係領域・物質的タイプ	0.17	-0.07	0.02	0.05	0.54**
6. 人間関係領域・心理的タイプ	-0.01	-0.22	0.03	0.06	0.03
7. 人間関係領域・指導的タイプ	0.12	0.31†	0.07	-0.06	0.12
8. 人間関係領域・情動的タイプ	0.04	0.02	0.13	0.10	-0.23
9. 情緒領域・物質的タイプ	-0.35†	-0.49*	-0.17	-0.21	-0.10
10. 情緒領域・心理的タイプ	-0.13	0.45†	-0.07	-0.34	-0.17
11. 情緒領域・指導的タイプ	0.26	-0.23	0.31	0.23	0.33
12. 環境文化領域・物質的タイプ	-0.05	0.01	-0.09	0.06	-0.21
13. 環境文化領域・心理的タイプ	-0.12	0.02	-0.07	-0.08	-0.21
14. 環境文化領域・指導的タイプ	0.14	0.47*	0.12	-0.01	-0.12
15. 環境文化領域・情動的タイプ	-0.03	-0.22	-0.03	0.01	0.16
R	.45	.50	.35	.47	.48

注) 表内の数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) である。

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

での適応が良好で、また、人間関係領域での物質的タイプのサポートをより多く提供可能な者ほど環境領域での適応が良好であることが示された。しかし、情緒領域での物質的タイプのサポートをより多く提供可能な者ほど、逆に勉学領域での適応が劣ることが示された。

### 3. 2. 2. 提供可能なサポートと留学目的重視度との関係

提供可能なサポートの総得点と留学目的重視度の総得点との間には有意な正の相関関係 ( $r = .46, p < .001$ ) の存在することが発見され、全体的により多くのサポートを提供可能な者ほど、多様な留学目的をより重視することが判明した。

4領域あるいは4タイプの提供可能なサポートを説明変数とし、留学目的重視度の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析を行い、その結果を表9に示した。環境・文化領域の提供可能なサポートと留学目的重視度の総得点及び言語領域得点との間に有意な正の $\beta$ 係数が見出された。すなわち、環境・文化領域でより多くのサポートを提供可能な者ほど、多様な

表9 4領域あるいは4タイプの提供可能なサポートを説明変数とし、留学目的重視度の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析の結果

提供可能なサポート	留学目的重視度				
	総得点	勉学領域	交流領域	文化体験領域	言語領域
勉学領域	-0.00	0.25	0.02	-0.19	-0.00
人間関係領域	0.14	-0.11	0.25	0.32†	-0.19
情緒領域	-0.01	0.00	0.02	-0.08	0.05
環境・文化領域	0.39*	0.28	0.22	0.32†	0.37*
<i>R</i>	.52***	.41**	.46**	.41**	.30
物質的タイプ	-0.19	-0.14	-0.02	-0.12	-0.35
心理的タイプ	0.49**	0.44*	0.46**	0.33†	0.25
指導的タイプ	-0.01	-0.10	0.07	-0.12	0.15
情動的タイプ	0.23	0.22	-0.00	0.29	0.18
<i>R</i>	.52***	.44**	.50***	.38*	.30

注) 表内の数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) である。  
 \*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

留学目的をより重視し、特に言語領域をより重視している。また、心理的タイプの提供可能なサポートと留学目的重視度の総得点、勉学領域得点、交流領域得点との間にも有意な正の $\beta$ 係数が発見された。すなわち、心理的タイプのサポートをより多く提供可能な者ほど、多様な留学目的を重視し、また、勉学領域と交流領域をより重視することが判明した。

15条件の提供可能なサポートを説明変数とし、留学目的重視度の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析を行った。表10によると、人間関係領域の物質的タイプのサポートと言語領域の重視度との間に有意な負の $\beta$ 係数が、人間関係領域の指導的タイプのサポートと交流領域の重視度との間に有意な正の $\beta$ 係数が、さらに、環境・文化領域の心理的タイプのサポートと全体的重視度、交流領域及び文化体験領域の重視度との間にそれぞれ有意な正の $\beta$ 係数が得られた。すなわち、人間関係領域での指導的タイプ

表10 15項目の提供可能なサポートを説明変数とし、留学目的重視度の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析の結果

提供可能なサポート	総得点	留学目的重視度			
		勉学領域	交流領域	文化体験領域	言語領域
1. 勉学領域・物質的タイプ	0.01	-0.11	-0.01	0.02	0.13
2. 勉学領域・心理的タイプ	0.08	0.28†	-0.03	-0.04	0.12
3. 勉学領域・指導的タイプ	-0.02	0.09	0.13	-0.10	-0.22
4. 勉学領域・情動的タイプ	0.08	0.04	0.03	0.05	0.12
5. 人間関係領域・物質的タイプ	-0.06	-0.15	0.06	0.18	-0.41*
6. 人間関係領域・心理的タイプ	0.06	0.20	-0.13	0.07	0.11
7. 人間関係領域・指導的タイプ	0.11	-0.25	0.44*	0.03	0.01
8. 人間関係領域・情動的タイプ	-0.00	0.10	-0.11	0.03	0.01
9. 情緒領域・物質的タイプ	0.02	0.03	-0.13	0.09	0.10
10. 情緒領域・心理的タイプ	0.15	-0.19	0.32	0.07	0.21
11. 情緒領域・指導的タイプ	-0.21	0.12	-0.24	-0.22	-0.23
12. 環境文化領域・物質的タイプ	-0.14	0.06	0.05	-0.34†	-0.16
13. 環境文化領域・心理的タイプ	0.42*	0.22	0.41*	0.39*	0.18
14. 環境文化領域・指導的タイプ	0.06	-0.02	-0.10	0.09	0.27
15. 環境文化領域・情動的タイプ	0.11	0.12	-0.03	0.15	0.11
R	.58*	.51	.62**	.55†	.45

注) 表内の数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) である。

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

のサポートをより多く提供可能な者ほど、交流領域をより重視しており、また、環境・文化領域での心理的タイプのサポートをより多く提供可能な者ほど、多様な留学目的をより重視し、特に交流領域と文化体験領域をより重視していることが明らかとなった。しかし、人間関係領域での物質的タイプのサポートをより多く提供可能な者は、逆に言語領域を軽視していることが明らかとなった。

3. 2. 3. 提供可能なサポートと留学目的達成満足度との関係

提供可能なサポートの総得点と留学目的達成満足度の総得点との間には有意な正の相関関係 ( $r = .32, p < .01$ ) が認められ、全体的に提供可能なサポートをより多くもつ者ほど、全体的な留学目的達成満足度は高いことが分かった。

4領域あるいは4タイプの提供可能なサポートを説明変数とし、留学目的達成満足度の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析を行い、その結果を表11に示した。勉学領域の提供可能なサポートと言語領域の

表11 4領域あるいは4タイプの提供可能なサポートを説明変数とし、留学目的達成満足度の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析の結果

提供可能なサポート	総得点	留学目的達成満足度			
		勉学領域	交流領域	文化体験領域	言語領域
勉学領域	0.28†	0.26	0.14	0.08	0.33*
人間関係領域	0.16	-0.17	0.03	0.20	0.35†
情緒領域	-0.02	0.01	0.08	-0.06	-0.07
環境・文化領域	-0.06	0.05	0.01	0.06	-0.24
<i>R</i>	.36*	.21	.23	.27	.44**
物質的タイプ	-0.06	-0.18	-0.22	0.07	0.10
心理的タイプ	-0.22	-0.20	-0.19	-0.12	-0.16
指導的タイプ	0.52*	0.53*	0.37†	0.29	0.37†
情動的タイプ	0.09	-0.03	0.26	0.02	0.02
<i>R</i>	.40**	.28	.32†	.28	.36*

注) 表内の数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) である。  
 \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

留学目的達成満足度との間に有意な正の $\beta$ 係数が見出された。また、指導的タイプの提供可能なサポートと留学目的達成満足度の総得点及び勉学領域得点との間にそれぞれ有意な正の $\beta$ 係数が発見された。すなわち、勉学領域のサポートをより多く提供可能な者ほど、言語領域での達成満足度が高く、指導的タイプのサポートをより多く提供可能な者ほど、全体的な達成満足度が高く、特に勉学領域での達成満足度が高いことが判明した。

15条件の提供可能なサポートを説明変数とし、留学目的達成満足度の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析を行った。表12によると、勉学領域の心理的タイプのサポートと満足度の総得点、交流領域得点、文化体験領域得点とのそれぞれ有意な負の $\beta$ 係数が、勉学領域の情動的タイプのサポートと満足度の総得点、交流領域得点、文化体験領域得点との間にそれぞれ有意な正の $\beta$ 係数が、人間関係領域の指導的タイプのサポートと満

表12 15項目の提供可能なサポートを説明変数とし、留学目的達成満足度の総得点あるいは領域別得点を基準変数とする重回帰分析の結果

提供可能なサポート	留学目的達成満足度				
	総得点	勉学領域	交流領域	文化体験領域	言語領域
1. 勉学領域・物質的タイプ	0.12	0.10	0.10	0.11	0.04
2. 勉学領域・心理的タイプ	-0.38**	-0.24	-0.36*	-0.48**	-0.07
3. 勉学領域・指導的タイプ	0.27	0.19	0.08	0.15	0.34†
4. 勉学領域・情動的タイプ	0.38*	0.30†	0.35*	0.43**	0.08
5. 人間関係領域・物質的タイプ	-0.14	-0.32†	-0.10	0.00	-0.04
6. 人間関係領域・心理的タイプ	0.14	0.24	-0.07	0.18	0.07
7. 人間関係領域・指導的タイプ	0.36*	0.10	0.40*	0.28†	0.25
8. 人間関係領域・情動的タイプ	-0.18	-0.26	-0.11	-0.37*	0.18
9. 情緒領域・物質的タイプ	-0.03	0.12	-0.31	0.13	-0.03
10. 情緒領域・心理的タイプ	-0.04	-0.20	0.21	-0.19	0.05
11. 情緒領域・指導的タイプ	-0.04	0.04	0.08	-0.03	-0.19
12. 環境文化領域・物質的タイプ	0.08	0.06	0.05	0.06	0.07
13. 環境文化領域・心理的タイプ	-0.09	-0.09	-0.16	0.11	-0.13
14. 環境文化領域・指導的タイプ	0.01	0.13	-0.08	-0.08	0.05
15. 環境文化領域・情動的タイプ	-0.04	-0.02	0.17	-0.05	-0.20
R	.60**	.52	.52	.60**	.52†

注) 表内の数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) である。

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$



足度の総得点及び交流領域得点との間にそれぞれ有意な正の $\beta$ 係数が、人間関係領域の情動的タイプのサポートと満足との文化体験領域得点との間に有意な負の $\beta$ 係数が見出された。すなわち、勉学領域で情動的タイプのサポートをより多く提供可能な者ほど、全体的な達成満足度、交流領域及び文化体験領域での達成満足度より高い。そして、人間関係領域で指導的タイプのサポートをより多く提供可能な者ほど、全体的な達成満足度及び交流領域での達成満足度がより高い。ところが、勉学領域で心理的タイプのサポートをより多く提供可能な者ほど、全体的な達成満足度も、交流領域と文化体験領域での達成満足度がより低く、人間関係領域で情動的タイプのサポートをより多く提供可能な者ほど、文化体験領域での達成満足度がより低い。

## 4. 考 察

### 4. 1. 必要とするサポートの機能

総得点を用いて、必要とするサポートと適応との関係を全体的に検討した結果、中国人私費留学生の必要とするサポートと適応の間には有意な相関関係が見出せなかった。本研究のこうした結果は、必要とするサポートと適応との間にネガティブな関係を指摘した Jou & Fukada [1995 a, 1995 b] の研究結果と異なる。領域別、タイプ別あるいは条件別に必要とするサポートを捉え、かつ、適応を領域別に捉えた場合、極めて部分的に、必要とするサポートと適応との間に有意な関係が認められた。しかし、そうした極めて部分的な関係も矛盾を含むものであった。例えば、情緒領域での必要とするサポートと情緒領域での適応との間にはネガティブな関係が存在するのに対し、指導的タイプの必要とするサポートと環境領域での適応の間にはポジティブな関係が存在する。これらの結果は、情緒的な面で不適応な留学生は、情緒面でのサポートをより多く必要としているが、環境領域で適応している留学生は、指導的タイプのサポートを積極的に必要としている、と解釈

できる。いずれにせよ、本研究の結果は、必要とするサポートが適応に対して強い説明力をもたないことを示している。

ところが、必要とするサポートの総得点と留学目的重視度の総得点の間には、有意な正の相関関係が発見された。領域別、タイプ別、条件別の必要とするサポートと領域別の留学目的重視度との間にも、部分的ではあるが、一貫してポジティブな関係の存在することが判明した。例えば、留学目的として言語領域をより重視している留学生は、勉学領域でのサポートをより多く必要としており、留学目的として勉学領域をより重視している留学生は心理的タイプのサポートを、文化体験領域をより重視している留学生は指導的タイプのサポートをより多く必要としていることが明らかとなった。このように、特定の留学目的を重視する中国人留学生ほど、特定のサポートをより多く必要としていることが分かる。

しかし、必要とするサポートの総得点と留学目的達成満足度の総得点の間には、全く何の関係もみられず、領域別、タイプ別、条件別サポート得点と領域別満足度得点との間にも全く有意な関係は見出せなかった。

以上のように、本研究では、当初の予想に反して、必要とするサポートと適応あるいは留学目的達成満足度との間にネガティブな関係が発見することができなかった。この理由の1つとして、ソーシャル・サポートの測定尺度の問題が考えられる。すなわち、本研究では、周 [1992] の在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度短縮版を使用して、ソーシャル・サポートの測定を行ったが、サポート測定を高めるために、周 [1993] のオリジナル尺度（在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度）を使用することによって、中国人私費留学生における必要とするサポートと適応あるいは留学目的達成満足度との関係を再検討することも考えられる。

#### 4. 2. 提供可能なサポートの機能

必要とするサポートに比べて、提供可能なサポートは、適応や留学目的達

成満足度との間により明確な関係を示すことが明らかになった。提供可能なサポートの総得点と適応の総得点の間には有意な正の相関関係が認められた。このように、本研究で得られた提供可能なサポートと適応との間の関係は、提供可能なサポートをもつ余裕のある留学生ほど適応は良好であろうという当初の予想と一致するものであった。しかしながら、領域別、タイプ別、条件別の提供可能なサポートと領域別の適応との間の関係をさらに詳細に検討してみると、矛盾した関係が併存していることも示された。例えば、勉学領域で提供可能なサポートをより多くもっている留学生は、情緒領域での適応が優れているが、情緒領域で提供可能なサポートをより多くもっている留学生は、逆に情緒領域での適応が劣っていることが明らかになっている。このように、部分的な矛盾を内在させつつ、全体として、提供可能なサポートは適応に対してポジティブな関係を有することが示されたと言えよう。

提供可能なサポートの総得点と留学目的重視度の総得点との間には有意な正の相関関係が見出され、提供可能なサポートを多くもつ留学生ほど留学目的の全体的重視度が高いことが見出された。領域別、タイプ別、条件別の提供可能なサポートと領域別の留学目的重視度との間には、部分的ではあるが、条件別サポートの1カ所の例外を除けば、おおむねポジティブな関係の存在が認められる。

提供可能なサポートの総得点と留学目的達成満足度の総得点との間には有意な正の相関関係が存在し、他者に提供可能なサポートをもつ留学生は留学目的達成満足度が高いであろうという本研究の当初の予想は支持された。しかしながら、領域別、タイプ別、条件別のサポートと領域別の適応との間の関係を詳しく分析してみたところ、条件別サポートと留学目的達成満足度との間に一部ネガティブな関係が発見され、提供可能なサポートと留学目的達成満足度との関係は、細部では矛盾が内在していることが示された。

#### 4. 3. まとめ

中国人私費留学生が他者から必要とするサポートと彼らの適応あるいは留学目的達成満足度との間にはネガティブな関係が存在するであろうと予想されたが、本研究の結果は予想を支持しなかった。

中国人私費留学生が他者に対して提供可能なサポートと彼らの適応あるいは留学目的達成満足度との間にはポジティブな関係が存在するであろうと予想された。本研究の結果は、おおむね予想を支持する方向のものであったが、サポートの構成要素別、適応や留学目的達成満足度の構成要素別に検討した結果からは、ポジティブな関係は部分的にしか認められないうえに、極めて一部分ではあるがネガティブな関係が併存することも示された。

なお、中国人私費留学生の留学目的重視度と必要とするサポートあるいは提供可能なサポートとの間にはそれぞれ概してポジティブな関係が存在することも明らかとなった。

#### 【引用文献】

- 周玉慧 [1992] 「在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートの送り手の分析」『広島大学教育学部紀要』第1部（心理学），41，61-70.
- 周玉慧 [1993] 「在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み」『社会心理学研究』8，235-245.
- 周玉慧 [1994] 「在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートの次元——必要とするサポート，知覚されたサポート，実行されたサポートの関係——」『社会心理学研究』9，105-113.
- Jou, Y. H. & Fukada, H. [1995a] Effects of social support on adjustment of Chinese students in Japan. *Journal of Social Psychology*, 135, 39-47.
- Jou, Y. H. & Fukada, H. [1995b] Effect of social support from various sources on the adjustment of Chinese students in Japan. *Journal of Social Psychology*, 135, 305-311.
- 周玉慧・深田博己 [1995] 「青年の心身の健康に及ぼすソーシャル・サポートのネガティブな効果」『広島大学教育学部紀要』第1部（心理学），44，45-52.
- 周玉慧・深田博己 [1996] 「ソーシャル・サポートの互恵性が青年の心身の健康に及ぼす影響」『心理学研究』67，印刷中.

- 岡益巳 [1992]「中国人私費留学生に関する実態調査——岡山県の場合——」岡山大学産業経営研究会（編）『研究報告書』27, 1-26.
- 岡益巳・深田博己・周玉慧 [1995]「中国人私費留学生のソーシャル・サポート」『岡山大学経済学会雑誌』27, 3, 29-59.
- 岡益巳・深田博己・周玉慧 [1996]「中国人私費留学生の留学目的及び適応」『岡山大学経済学会雑誌』27, 4, 25-49.
- 上原麻子 [1988]「留学生の異文化適応」広島大学教育学部（編）『言語習得及び異文化適応の理論的・実証的研究』広島大学教育学部, Pp. 111-124.

## On Relation between Adjustment to Japanese Society and Social Support of Chinese Students Studying in Japan at Private Expense

Masumi Oka, Hiromi Fukada and Yuh Huey Jou

The present study examines the relation between the adjustment of Chinese students to the Japanese life and social support they need from others or various support they can give to others. Eighty Chinese students studying in Okayama prefecture at private expense responded to our questionnaire.

The former studies (Jou & Fukada [1995 a, 1995 b]) clarified that there was a negative relation between needed support of Chinese students and their adjustment or their satisfaction with campus life. Based upon the result of these studies, we predicted a negative relation between them also in the present study. Namely, we presupposed that the more support they needed, the less adjustment and the less satisfaction they would have. The present study, however, has revealed that there seems to be no relation between them.

We also predicted a positive relation between the amount of support Chinese students can afford to others and their adjustment or their satisfaction with campus life. That is, we thought that the more support they could provide, the better adjustment and the more satisfaction they can have. The data obtained in this study have also revealed that there exists a positive relation in general between Chinese students' support providable to others and their adjustment or their satisfaction with campus life. Further analyses using subscores, however, indicate that every area or type of providable support does not necessarily have a positive relation with every area of adjustment or every area of satisfaction with campus life. Moreover, our study has revealed that there also exists a negative relation between them though in an extremely minor part.